大磯、平塚のムギブチ唄・唐臼挽唄

林　　英一

1．はじめに

昔はいろいろな時間・場で唄が唄われてきた。その時間・場によって唄を類別することができる。たとえば結婚式などの目出度い席で唄われるものは祝唄、仕事中に唄われていたものは仕事唄、あるいは作業唄と呼ばれる。

現在でこそあらゆる仕事に機械が入り込み、ボタン一つの操作だけで、我々の手間は省力化されているが、機械化される以前は当然のことながら、すべてが手作業で、多くの手間と労力をかけて仕事が行われていた。その仕事をやりながら昔はよく唄が唄われていた。唄は手間と労力そのものを軽減させることはないが、気分を楽にし、作業効率をあげるのに役立っていた。

しかし、現在では機械化、および生活の変化のために仕事唄をはじめとする唄が唄われることもなくなり、ほとんど忘れ去られようとしている。唄を唄う時間と場が消失してしまったためである。

大磯町郷土資料館学芸員の佐川和裕氏が大磯町寺坂、平塚市御殿で伝承されていたムギブチ唄、唐臼挽唄を採録し、筆者がそれを採譜する機会を得た。これらの唄を記憶している人も現在ではほとんどいなくなってしまっている。そこでこれを記録として残す必要から、若干の考察とともに報告する。

2．ムギブチ唄

ムギブチ唄は麦打唄であり、収穫した大麦を庭に広げ、クルリ棒で打って脱穀する（麦打ち）ときに唄われた唄である。寺坂では隣近所が集まり、屋敷の庭に5人ずつが向き合って、唄いながらクルリ棒で叩いていたという。麦打ちをすると芒で体中がかゆくなり、海に近い地区では終わるとすぐ海に遊びに行ったという。かなり大変な作業であったようで、唄うことで[1]気をまぎらわしていたのであろうか。

ただし麦打ちするときにかならず唄が唄われていたわけではなく、西小磯東では「ドッコイショドッコイショ」という掛け声だけで唄うことはなかったという。西小磯東では隣近所が集まって麦打ちを行うことはなく、家族を中心として行われていたということであり、すべての地区を当たっていないので断定的なことはいえないが、作業の社会的な共同性が唄の存在と関わっているといえるかもしれない。

では採譜した唄を紹介しよう。

〈1〉　大磯町寺坂の麦打唄

寺坂では二つの麦打唄が採録されている。一つは須藤カメさん（明治25年生、故人）が、一つは杉崎ユキさん（明治18年生、故人）が唄い手となっている。なお、杉崎ユキさんは昭和55年に亡くなっており、渡辺美代さん（明治35年生）がたまたま録音しておいたものを佐川氏がさらにテープ録音した。採譜はそのテープから行ったものである。録音状態はあまりよいとはいえず、歌詞に聞き取れなかった部分がある。

杉崎ユキさんの唄は、天保12年生まれの渡辺慶次郎さんが口ずさんでいたものを覚えたものであるということである。

楽譜（1）での歌詞は、

おまいさんとなれば
あどっこいどっこい
どこまでも
親を捨て
この世は闇となるまで

である。「あどっこいどっこい」は合いの手であろうが、この部分も音程があったので楽譜におとしてある。

この歌詞は恋唄と考えられる。だからといって男と女が実際に恋する気持ちを表すために唄われたものではなく、恋の唄を唄うことにより、作業の場を盛り上げ、作業効率を高めたものということができる。仕事唄としてこのような恋唄が唄われることはよくあることのようである。

さて、旋律を楽理的にみていくと、f（ファ）が核音としてもとめられる。核音とは終始音となるなど、唄の中で固定的に中心的な役割をなす音のことである。ただし核音は一つの旋律に一つだけとはかぎらず、複数の核音がもとめられる場合がある。この唄でもb（シb）がもう一つの核音としてもとめられ、全体が四度音程の核音に支配された旋律となっているということができる。

さらに核音の間にある中間音の音程を捉えると、部分的に都節音階がみられるものとなっている。

半音程の音階を持つ都節音階は、座敷唄として洗練されたもので、純粋の仕事唄にはみられない音階である。

ところで厚木市には「お前とならば何処迄も山奥のさいかち原の中までも」という、楽譜(1)であげた歌詞と類似の歌詞が伝わっている。前半部分が同じであることから、両者はまったく無関係とはいえないであろう。厚木の唄は「天保3年春に江戸より流行したもの」ということであり、すると今回寺坂で得られた歌詞も江戸時代の流行唄[2]を基にして成立したものと推察することができる。

このように江戸時代の流行唄が、現在仕事唄として定着している例は他にも認められる。

たとえば、

曇らば曇れ箱根山
晴れたとて
花のお江戸は見えやせぬ

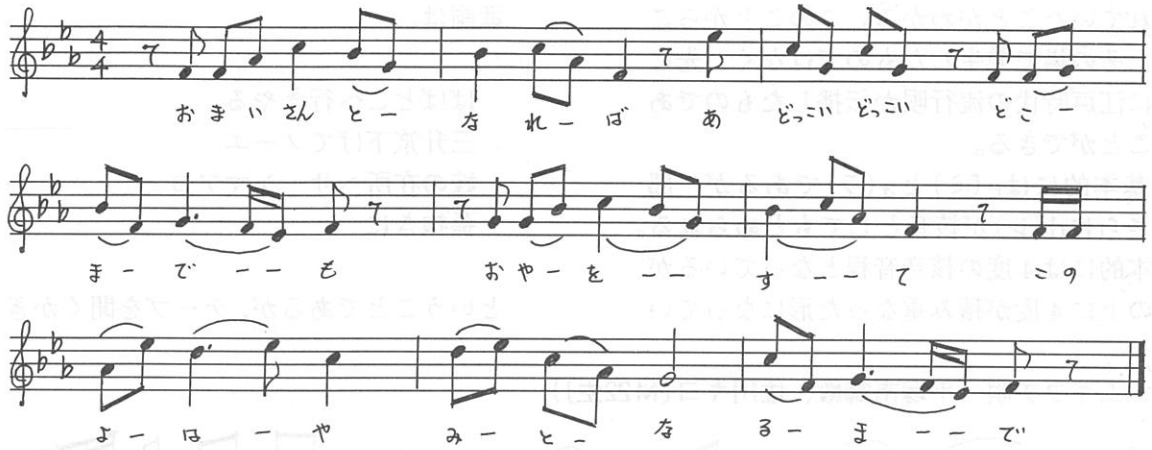
という歌詞は足柄上郡上中村の麦打唄であるが、[3]この歌詞は明和8年(1771)に刊行された『山花鳥虫歌』にもみえ、その註には「おそらく明和から天保頃まで江戸を中心に関東・中部一帯に流行したものであろう」とある。

江戸時代の小唄などの流行唄[4]などを取り入れて成立しているということから、すでに唄われていた旋律の上に外部からの影響があり、本来的には都節音階ではなかった旋律が、その影響で部分的に都節音階化したということができるかもしれない。

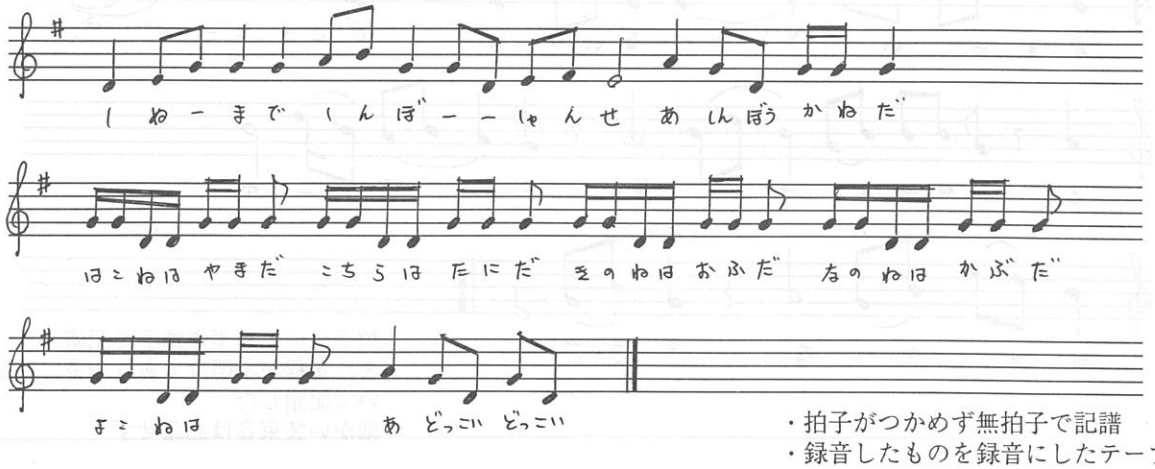
楽譜(2)の歌詞は、

死ぬまでしんぼーしゃんせ
あしんぼは金だ
箱根は山だ
こちらは谷だ
木の根はボクだ
菜の根は株だ
よこねはカサだ
あどっこいどっこい

楽譜(1)　ムギブチ唄（大磯町寺坂、須藤カメ〔M25生〕）



楽譜(2)　ムギブチ唄（大磯町寺坂、杉崎ユキ〔M18生〕）



・拍子がつかめず無拍子で記譜
・録音したものを録音にしたテープから採譜

となっている。

「死ぬまでしんぼうしゃんせ」に旋律性があり、その後はd(レ)とg(ソ)だけの音で、どちらかというとリズム的となっている。

前半部分の核音を捉えると非常に微妙であり、e(ミ)とa(ラ)の4度か、またg(ソ)の一つだけ、あるいはd(レ)とg(ソ)の4度というように固定的に捉えることができないものとなっている。

さて、楽譜(1)と楽譜(2)とは旋律的にはまったく異質であるといえ、麦打唄として同じ地区で伝承されていたものであるが、一つの地区に二つの唄が並立的に存在していたということになる。

3．平塚市御殿の麦打唄

これは佐川キヨさん（明治22年生）が唄い手となっている。

楽譜(3)をみてわかるように、歌詞は楽譜(1)で紹介したものと同じである。このように唄の歌詞はひろがりをもった地域でみられ、地区に固有のものではないものがほとんどである。楽譜(1)・(3)と同じ歌詞は他に相模原市や東京都板橋区赤塚町でも確認でき、かなり広い[5]範囲で麦打唄として唄[6]われていたことがわかる。このことからこの歌詞は、その場で発生したものではなく、先にみたように江戸時代の流行唄が伝播したものであるということができる。

核音は基本的にはe(ミ)とa(ラ)であるが、部分的にはさらにd(レ)が核音としてもとめられる。すると基本的には4度の核音音程となっているが、さらにその上に4度が積み重なった形になっているということができる。

ところで楽譜(1)の唄とこの唄は同じ歌詞で採録されているが、聞いた感じはまったく別の唄という印象であった。実際に上でみたように核音の構造は両者は大きく異なるものとなっている。また、楽譜(1)では部分的に都節音階がみられたが、楽譜(3)では都節音階の部分はない。構造的にも異なる唄として捉えられるのである。

異なる地区で異なる旋律が得られることは、それ程不思議なことではないであろう。ここで興味がもたれるのは、同じ歌詞をもちながら異なる旋律をもつ唄が存在することである。しかも、この場合の歌詞は、江戸時代の流行唄に関連するものと考えられる。唄は旋律を伴って伝播するといえるならば、少なくともここで得られた唄は同じ旋律であったことが推察される。そのために、ここで得られた旋律は、一つの唄が別の展開をなしたものと考えることができるのではないか。

4．唐臼挽唄

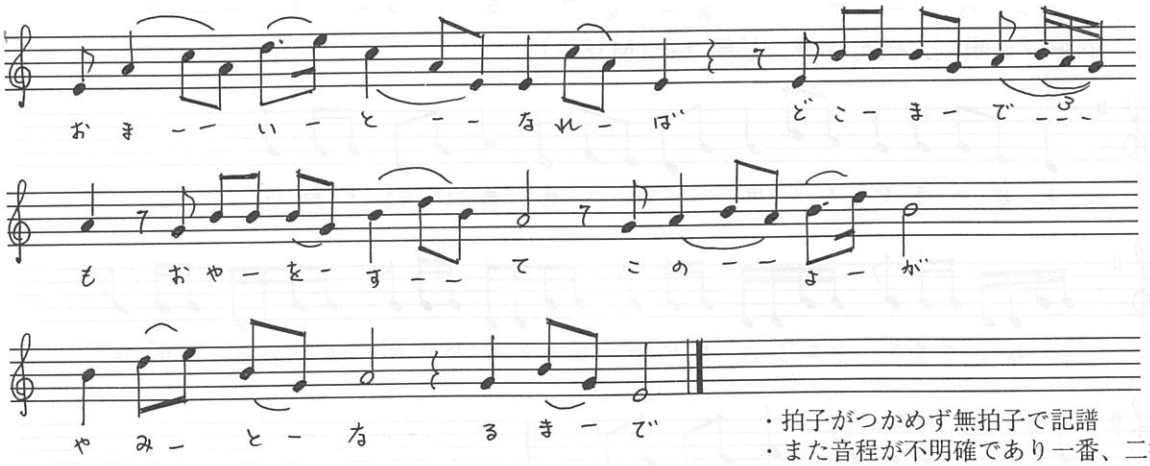
大磯町寺坂の杉崎ユキさんが唄ったものである(楽譜(4))。

歌詞は、

ばばどこへ行きやる
三升笊下げてノーエ
嫁の在所へサーンマアヨー
孫抱きに

ということであるが、[7]テープを聞くかぎり、「い

楽譜(3)　ムギブチ唄（平塚市御殿、佐川キヨ〔M22生〕）



・拍子がつかめず無拍子で記譜
・また音程が不明確であり一番、二番をつないで記譜した
・細かい装束音は記譜せず

ざーる三升笊下げて」となっている。「ばばどこへ」の部分がテープからは分からなかった。したがって、テープで聞けた部分を楽譜にしている。

なお、この歌詞は現在のところ、近隣地区では確認できていない。

旋律的にはes(ミb)が全体を通した核音となっているが、as(ラb)もまた核音的であり、やはり4度音程の核音構造をもつ唄であるということができる。終始への導音が、esの半音上のeとなっており、部分的に都節音階的な展開がみられるものとなっている。

ところで、西小磯東で臼挽唄の断片が得られた。高橋要蔵さん（明治41年生）が記憶していたものである。

しんぼう金だよ
おおおじさんよ
ギーコーギー

というものであった。全体はよく分からないが、「しんぼう金だよ」の部分は、先に楽譜(2)で紹介した寺坂　の麦打唄と、歌詞だけでなく旋律的にも同じものであったのである。

このことは麦打唄と臼挽唄とに同じものがみられたという（今回得られたのは部分的な展開であるが）ことであり、唄が作業と対応していないことを示しているということであろうか。

5．おわりに

以上、大磯、平塚で得られた麦打唄・唐臼挽唄を中心に紹介した。先に指摘したように、同じ歌詞をもつ唄の音階構造が異なっており、伝播と受容という視点からこれを捉えた場合、どのようなことが考えられるであろうか。今後は近隣地区の旋律も検討することによって、唄の伝播と受容の様式を詳しく捉えてみたいと思っている。

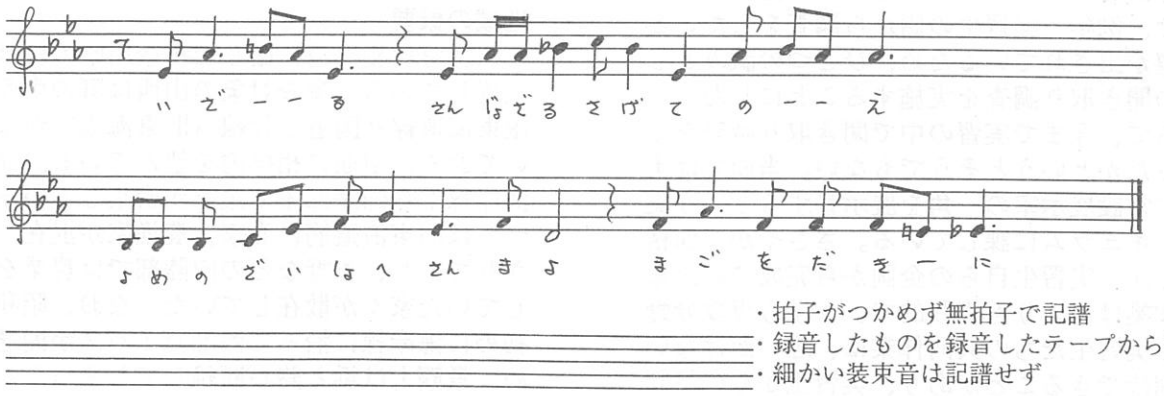
なお、本報告にあたり、國學院大学文学部教授須藤豊彦先生からいろいろと御教示をいただいた。また、相模原市立博物館の加藤隆志氏、厚木市教育委員会の大野一郎氏から多くの資料を提供していただいている。感謝いたします。今後はこれらをいかして論考をすすめていきたいと思う。

【註】

(1)大磯町史民俗調査報告書2『国府の民俗(二)－月京・生沢・寺坂地区－』大磯町、1994年。
(2)厚木市文化財調査報告書第14集『あつぎの古謡』厚木市教育委員会、1973年。
(3)『日本民謡大観 関東編』日本放送協会、1944年。
(4)『山花鳥虫歌』浅野建二校注、岩波文庫、1984年。
(5)『県央の民謡－仕事唄・行事唄・娯楽唄・子守唄・わらべ唄』神奈川県県央地区行政センター県民部県民課1994年。
(6)前掲註(3)
(7)『資料室だより Vol2－No7』大磯町教育委員会、1985年。

（日本民俗学会・日本民俗音楽学会会員）

楽譜(4)　カラウスヒキ唄（大磯町寺坂、杉崎ユキ〔M18生〕）



・拍子がつかめず無拍子で記譜
・録音したものを録音したテープから採譜
・細かい装束音は記譜せず